

# 「踏みしめて」第16号

～町の様子を皆様に伝えていきます～



亀澤 進

皆様のご協力の下、「商店街夏まつり」、「みんなで森ほたる」、「納涼花火大会」が、情緒溢れる中盛大に開催されました。また、マスメディアによるPR効果で、町外からの来訪者も年々増加傾向にあります。こうした状況の中やはり考えていきたいのが経済効果です。今後においては、少しでも森町にお金が落とされるようにすることも視野に入れながら、事業展開を提案していくつもりです。

今号は、視察研修を主にご報告していきます。

## ～みんなで守り、育てる地域医療～

7月24日に、「地域医療を考える」講演会に出席しました。講師は、夕張市病院経営アドバイザーや地域医療の著書が出版された城西大学経営学部准教授の伊関友伸氏と、閉鎖寸前の小児科を、地元の母親らが大運動を起こしてよみがえらせテレビドラマにもなった、「兵庫県立柏原病院の小児科を守る会」代表の丹生裕子氏のお二人でした。

伊関氏のお話では、日本の医師数は先進30カ国中多い順から26番目にあたり、日本の医師一人当たりの外来件数は世界一多いそうです。

これまで国は、医師が増えると医療費が増えるという考え（「医療費亡国論」）により、医師数の抑制政策を行ってきました。しかし、医療の高度・専門化により、1人の患者の疾病を複数の専門科の医師が診ることになりました。更に、インフォームドコンセント（患者への十分な説明と同意）や医療安全の考えが入ってきたため、医師の仕事が増えることとなりました。

少ない医師で多くの仕事をこなさなければならぬことから、日本の医師の労働環境は非常に劣悪な状況になってきています。特に医師不足が深刻な産科、小児科、救急などの現場では、過労死寸前の状況になっているそうです。日本の医師の週平均時間外勤務時間は、66.4時間にもなるそうで、1ヶ月あたりの休日日数が4日以内という医師は、46.3%にもなるそうです。こうした環境により、18%近くの医師が精神的に追い込まれているそうです。

若い医師は、医療の高度・専門化や訴訟の増大などから、自らの医療技術を向上させることに最大の関心を持っています。そのため、それらに対応した、症例の多い病院に集まるという構造になっています。住民（患者）も、マスコミの報道する「病院・名医ランキング」や口コミなどで、高度・専門医療を提供する病院に集

まっています。地域の病院は、夜間のコンビニ救急か介護施設の不足による社会的入院ぐらいしか利用しなくなってきているようです。

このような状況から、医療の高度・専門化に対応し、医師・看護師が集まる病院は収益が上がり、医師・看護師の集まらない病院は収益が上がらず衰退してしまうという2極化が生じてきています。

こうした状況を打破するにはある程度の給料と、働きがいのある職場にすることが大事で、人によっては、それが技術向上であったり、知的関心であったり、尊敬・感謝であったり、素晴らしい仲間であったり、自分の時間であったり、お金であったりするということです。しかし、医師の過酷な勤務状態に対して、国民（患者）の理解は低く、相手（医師）の立場を考えず、自分たちの都合だけで行動する人が多いのが現状だそうです。

「兵庫県立柏原病院の小児科を守る会」は、こうした状況を、一人の母親の体験談からみんなが気持ちを変えて、小児科を働きがいのある職場に変えていきました。

①コンビニ受診を控えよう。②かかりつけ医を持つ。③お医者さんに感謝の気持ちを伝えよう。これら3つのスローガンを掲げ、更に浸透させるためのステッカーも作製しました。

### ◆#8000（小児救急電話相談）

受診すべきかどうかを電話相談することで勤務医の負担減につながる。

### ◆こどもを守ろう お医者さんを守ろう

医師を守ることが、ひいては住民を守ることにつながる。

### ◆地域医療を守るの一人ひとりの心がけ

子育て世代だけでなく幅広い年代に呼びかけるため。

ホームページ <http://mamorusyounika.com>

## 新しい公共の方向性とは

7月29日に、「袋井市森町議会議員研修会」が開催されました。講師はNPO法人「グラウンドワーク三島」の事務局長渡辺豊博氏でした。

グラウンドワークとは、1980年代から賃金と生産性の構造不況により財政が悪化したイギリスではじまり、住民、企業、行政の三者が協力して、地域の環境を改善していこうというものです。持続可能な地域環境の再生、及び環境マネージメントを実戦し、同時に地域の自立を促し、行政と市民の協力関係。また企業との関係を構築し、地域社会が自分たちの環境や社会をより豊かにすることを目的として活動しています。また経済的な活性化を促し、環境と経済の両立をめざしています。

これらの仲介役を担う団体が「グラウンドワーク三島」で、日本の先駆けとなりました。

●市民・NPO・企業・行政のパートナーシップにより、汚れた源兵衛川の環境再生を実現。地域協働でドブ川をホテル舞う川に再生しました。

●商店主、農業者、大学生、若者、シニア、女性との協働による街中元気再生  
現在、大通り商店街の空き店舗率は0%になりました。

●地域協働ビジネスへの取り組み  
雇用の創出やNPOの起業化を実現しました。

他にも40カ所以上の現場モデルを実現し、のべ3,200人を人材育成しています。また、こうした活動を参考に、全国20カ所以上でグラウンドワーク活動団体が誕生しました。

日本の財政は悪化の坂道を転げ落ちていきます。さらには少子高齢化の進展で必然的に生産者人口は減少していきます。膨らむ社会補償費。一向に改善されない縦割り行政にとまなう2重3重の公共工事。

これからの公共は、市民が主体となったグラウンドワークのような形態が主流となるのではないのでしょうか。

グラウンドワーク三島 <http://www.gwmishima.jp/>

## 世界と国と地方

8月18日に、「静岡県市町議会議員研修会」に出席しました。講師は、国際政治学者の浅井信雄氏でした。

浅井氏のお話では、日本はGDPを気にしすぎているそうです。アメリカに次ぐ世界第2位で、3位の中国との差はごくわずかになっていて、その追い上げに危機感を感じているわけですが、人口は日本が1億2千700万人、中国は13億4千600万人で、一人当たりで見れば気にするものでもないようです。また、中国人から見る世界第2位の日本はあまり幸せそうには見え、日本人はいつも金を持っていそうなのを言っていました。

日本はメディアに振り回されやすく、放送されるのはほんの一部であるため、見えないことをどうやって気付くかが大事だそうです。それは、知識と経験（成功・失敗）、カンと想像力を養うことだそうです。

中国人や韓国人の観光客を誘致すると言っていますが、日本人は勉強が足りないそうで、中国や韓国人の人は日本のことをしっかり勉強しているそうです。地方が観光でお金を儲けようとするならば、相手の国のことをもっと勉強しておく必要があると言っていました。



## ゴミの持ち帰り運動

8月7日に、森町環自協でゴミの持ち帰り運動を実施しました。

河原でバーベキューなどをしている方たちに、「ゴミは持ち帰りましょう！」と、ゴミ袋を分けて回りました。

近年はマナーも良くなってきているようで、既にゴミ袋を持参してきている方も大勢いました。